

# 市民が綴った戦争体験

## まえがき 《刊行に際して》

わが国はあの悲惨な戦争を経て、飛躍的な発展のもとに恒久平和国家をめざして、たゆみない歩みを続けてまいりました。

しかしながら、現在地球上には莫大な量の核兵器が蓄積、配備されており宇宙空間も核兵器により覆いつくされようとしています。

核の脅威、戦争への危険性はますます高まっております。

このような状況の中で、文化的で人間性豊かな都市環境を創り出し、市民一人ひとりが、安心して住み、働き、学び、憩うことのできる平和な社会を実現し保障することは、自治体に与えられた崇高な使命であり、課題であります。

本市におきましては、昭和 58 年 9 月に全人類の恒久の平和と安全を願い、地球上からあらゆる戦争と核兵器の廃絶を訴える非核平和都市の宣言を市議会の賛同のもとに行い、平和への誓いを新たにしたところであります。

この宣言の主旨に則りまして、市民総意のもとに「こどもたちへ引き継ぐ平和なまち大東市」をめざして、平和の原点を問い、平和の尊さを訴え、この人類普遍の大義に向かって不断の努力を続けてまいりる決意であります。

この戦争体験記の冊子には、市民の貴重な体験が綴られています。いずれも戦争の悲惨さと核兵器の恐ろしさを訴えるものであり、つねに平和への願いを伝えるものとして、戦争を知らない世代へ語り継がねばならないと考えます。

最後に、冊子刊行に際しましては、原稿を寄せていただいた市民の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 2 年 3 月

大東市長 西 村 昭

## 目 次

まえがき 《刊行に際して》

1	内地にて……………	坂本すゑの	大正 13 年生まれ	… 1
2	旧陸軍軍用船の積載火薬爆発に遭遇して…	木岡 利一	大正 13 年生まれ	… 3
3	私の戦争体験……………	吉宗美枝子	明治 44 年生まれ	… 5
4	自分の人生を自分で生きたい……………	柳原 章子	大正 11 年生まれ	… 7
5	懐かしき被爆者戦友会……………	森井吉太郎	明治 42 年生まれ	… 9
6	私は「地獄」を二回見た……………	永沢 由松	明治 33 年生まれ	…11
7	戦争と原爆……………	小松 朗	大正 13 年生まれ	…12
8	十五年戦争を生き抜いて……………	山崎 武一	大正 4 年生まれ	…14
9	広島近郊にて……………	平田紀美子	昭和 15 年生まれ	…16
10	私の被爆体験記……………	萬木 梅子	大正 3 年生まれ	…21
11	被爆当時を記憶のままに四十五周年の今…	北川 静恵	大正 15 年生まれ	…24
12	関東軍哀史……………	今泉 良三	大正 10 年生まれ	…27
13	外地にて戦後の生活記……………	田島しげの	大正元年生まれ	…29
14	私の体験……………	伊藤 秀英	大正 11 年生まれ	…31
15	戦争体験記……………	伊藤 勝音	大正 14 年生まれ	…33
16	戦争体験記……………	大東 英喜	大正 15 年生まれ	…35
17	平和の尊さ……………	東 金五郎	明治 41 年生まれ	…37

### 【資料】

非核平和モニュメント

非核平和都市宣言文

広島市被害状況図

長崎市被害状況図

抑留・引き揚げ関係図

あとがき



## 内地にて

坂本すゑの 大正 13 年生まれ

大東亜戦争が激しさを増し、本土も空襲が続く昭和 19 年の初秋の事、大阪中之島に住んでいた私は、市からの妊婦強制疎開を命ぜられ、姫路の実家に帰って居りました。翌 20 年の夏、その日も真夏の太陽が照りつけ、セミの声が暑さを思わせて居りました。

3月に生まれた長女のアセモを少しでもよくしようと、海に連れて行くのが日課でした。昼食を済ませ、海へと出掛けながら、虫の知らせとでも云うのでしょうか、この日に限って小さなタライを持って行ったのです。

海辺には多くの人達が戦時下である事も忘れた様に、楽しく海水浴をしていました。朝から空襲警報も無く、安心していた時です。突然敵機が現れ、人々に向かって機銃掃射を始めたのです。子供の泣き叫ぶ声や悲鳴で楽しかった海辺は、一瞬にして地獄の様子に変わってしまいました。私は子供を守らねばとタライを頭にかぶり海の中にと逃れたのですが、銃撃は幾度となく続き、恐怖で胸が押し潰れそうでした。どれ程時間が過ぎたでしょうか。静かになったので四方をながめた時、多くの人達が血を流し死んでいたのです。白い砂浜は血に染まり海水も赤くなっていました。何とむごい事でしょう。足がふるえ、歩くのもやっとの思いで、泣きながら家に帰りついた時は言葉も出ませんでした。子供も長い時間海水につかっていた為でしょう、グッタリとなり泣く事も出来なくなっていました。

よく助かった事と子供を抱きしめた時、空襲警報のサイレンと共に激しい銃撃が始まったのです。危ないと子供を抱きしめ、奥の室へと逃げ込みホッとした時、私の顔を掠める様にダムダム弾が通り抜け、押し入れの中に飛び込んだのです。ほんの少し右に寄って居たら私は即死していたのです。押し入れの中の布団は形の無い程に飛び散り弾の凄さに呆然としていました。人の呼ぶ声に我に返ると、仕事を中止して父が帰って来ていました。初孫と私の無事な姿を見て、父と私は手を取り合って泣きました。壁には弾の入った穴が口を開け、建具も飛び散って、家の中はメチャクチャでした。

一日に二度も死の恐怖に逢った話をしていると、町会長さんが叔父の死を伝えに来られ、父と一緒に叔父の家に行きました。眼の辺りにした凄惨なありさまは生涯忘れる事が出来ません。庭一面に血が飛び散り、叔父の姿はありません。「叔父さんはどこ」と聞いても、誰も答えてくれません。どの人の顔も真青になり、言葉を忘れた様に立ちすくんでいました。私を見つけたもう一人の叔父が室に呼んでくれ、亡くなった叔父はダムダム弾に当たり体の

ほとんどが飛び散って姿も無くなってしまったと聞かされました。障子や畳に残ったほんのひとにぎりの肉片が叔父の姿だったのです。あまりのショックで外に出た私は、大声で叫んでいました。「戦争なんか大嫌いだ、早く終わってしまえ」と涙で叫び続けました。あんなに優しい叔父を奪い女子供を奪う、何と戦争とはひどい無慈悲な事でしょう。人と人が殺し合い、親や妻子が涙に暮れる、本当に嫌な事です。

8月15日の終戦放送を聞いた時は、これで空襲や死の恐怖からやっと解放されるのだと、喜びで胸が一杯になりました。終戦後の苦しみも筆舌につくしがたい思いでしたが、死の恐怖に比べれば、頑張っ生きて抜く為の希望の苦しみでした。焼土と化した大地に日一日と街並が復活し、緑が目には沁みるようになって、平和と云う事が如何に大切かとしみじみ思われます。

私と共に死の恐怖から逃れることができた娘も、今は44歳になり、二児の母として幸福に暮らしています。今、当時の事を思い起こす時、悲惨な戦争は二度としてはいけないと思います。

戦後44年、我が国は先進国として高度成長し、躍進を続けていますが、戦争の爪跡は決して消え去る事は無いのです。今も尚、長崎や広島には、被爆の為病床に多くの人達が居られるのです。平和に酔いしれて、過去におこした戦争と云う人道上許されない悲惨な事件を、決して忘れ去ってはいけないと思いますし、平和と云う尊い日々がこれからも幾久しく続いて行ってほしいものです。

## 旧陸軍軍用船の積載火薬爆発に遭遇して

木岡 利一 大正 13 年生まれ

「ドドーン、ドーン、ドカーン」

天地を揺るがす大音響と共に、黒煙を混じえて、火柱が高く漁港の朝空を被った。終戦間近の昭和 20 年 3 月半ばの惨事である。

第二次世界大戦の情勢悪化に依って、軍によるわが国の沿海輸送は、次第に太平洋から日本海へと移された。その頃、小さな漁港、鳥取県の境港にも、旧陸軍船舶隊が駐屯し、軍用船の軍需物資陸揚げは日夜限りなく行われていた。満州からの大豆等に加えて、強硬とも、無謀ともいえる火薬類の陸揚げ作業が、全く無防備である、港湾施設の中で行われた事が、此の惨事を招いた最大の原因ではなかろうか。憂慮された爆発事故は、必然的と云っても過言ではない程の高い危険率で、周辺施設を襲ったのである。

「港の爆発炎上に依って、当時の市民の平和願望は、何故か軍への憎しみとなり、反戦感情へと変っていったものです。」

と、当時の被災者体験者に依って、今もなお語り継がれている。

軍事労働のみの目的で徴兵され、碌に訓練も施されずして、この種の荷揚げ作業に携わっていた初年兵達の数多くが、その尊い命を散らしていったのである。惨劇としか言いようのないこの状況を眼の辺りに体験し、浜に移送した数多い戦死者の茶毘を見た時、私はその悲惨と残酷に涙したものである。その生命の、一つ、一つの重さが、四十有余年を過ぎた今も尚、私の胸に強く迫るのである。

広島に本部が置かれていた、旧陸軍船舶隊「暁部隊」は、ここ境港にも支部を設けて駐屯した。私の中隊が港の警備の任を受け、広島から移動駐屯したものは、未だ雪の残る終戦の年の 2 月であった。港に近い余子村の小さなお寺を仮兵舎とした中隊は、爆発の前夜、村落の女子青年団の慰問演芸を楽しみ、その日は一時間の起床延刻が認められていた。今だからこそ云える「命拾い」である。本部は、上道という村落を過ぎて約 3 キロの道程だ。兵舎を出発して上道村に入る頃、一回目であろう小爆発であった。不審に思いながら尚も進むと、意外に早く大震動を伴って二回目の大爆発が起こり、港が炎上するのを見た。

「何事ですか！ー」

伏せていた隊の後方で誰かがこう叫んだ。

「目標ー！境の港ー！駆けあし前へー！」

再び前進の号令で現地へ急行した中隊が、港に入る頃には、数回の爆発は終り、集積した火薬はこの時、全部爆発したと後で知った。港の中心を走る駅前通りは炎の海と変わり、火薬の再爆発の危険もあって、現場には近寄る事も出来ない。消火作業も出来ず、救助作業も出来ないまま、爆風で飛ばされた多数の死体を見た。荷揚げ作業中の直撃であった。市民は火薬の再爆発を恐れ、唯、殺気立って逃げ惑うのみの状態だ。此処で中隊は活動の不可能なる事を判断し、他の隊と連絡をとりながら本部へ逆行した。

「兵隊さん！もう爆発は起らんの！」

顔青ざめて、黒く汗をいっぱいかいた子供連れの女性が、本部前で、こう云った。

「これも戦争だ!!」

奥で一士官が、非情にもこう叫んだ。哀願にも似た願いに、答えはかくも冷酷なのか。泣き出した子供を引っ張るようにして走り去るその表情には、信頼しきった軍への、新たな憤りが、戦争への憎しみが、重く、そして深く潜んでいたのを、私は、自分が軍人である事を忘れて、感じとっていた。

廃墟と化した被災地では、救いを待つ市民に混じって、尚もあえぎ続ける老人と子供を見た。戦争が生んだ憎むべき悲劇は、豊かであったこの漁港の町を変えてしまっていた。

焼け跡のくすぶりは収まり、油送船の繫留は対岸に移されて、港町にはやっと平静さが戻り、昭和 20 年は、もう夏が近づいていた。大阪の空襲や、原爆投下の惨状が報じられる頃、境港では米軍機グラマンの来襲を数回みたが、被災地復興の槌音は、平和への希いと、切なる祈りを込めて、力強く響いていた。

## 私の戦争体験

吉宗美枝子 明治 44 年生まれ

忘れる事の出来ない昭和 20 年 3 月 13 日夜中、空襲警報で飛び起き避難の用意、ラジオは盛んに「B29 は、浪速に向かっていきます」と報じている。

今までと違うような胸さわぎを覚えつつ外を見ると、難波方面の空は真赤、突然向かいの屋根に焼夷弾が落ちてきてびっくり。もう深く考える余裕もなく、何も持たず、母と子供、隣の子供の 4 人で近くの学校へ避難しました。学校の隣のお寺も火につつまれ、大勢の避難者の中で立っているのも暑い位でした。

いよいよ周りも火につつまれどうしようもなくなった時「助かりたかったら、学校のプールに飛び込め」と男の人の叫び声が聞こえてきました。一瞬ためらいましたが、勇気を出して炎の中をくぐり抜け、思いきってプールに飛び込みました。しかし 3 月の水は冷たく、直ぐ出ようとしたのですが、上は危険だと思ったのでしょう、誰かが足をひっぱってくれて、それからは防空頭巾をぬらしてはかぶりながら、何時間かじっとつかっていました。その間中、メリメリバリバリ、どんなに恐ろしかったことか。火も少しおさまり、夜も明けたはずなのに、空は煙のせいかまだ暗く、誰かがプールを出てたき火で暖をとっていたので、恥ずかしさも忘れ、着ている物一枚つつ火にあぶり乾かしました。

一面焼野原、何の目印もないまま我が家をさがすのは、大変でした。足もとほくすぶりつづけ、履き物を通してなお熱い中、とりあえずは親戚が入院している大学病院へ行き、廊下の片隅で一晩明かしました。翌日、体の不調で診て貰うと、三ヶ月とのことで、できれば田舎で出産するようにと云われました。大阪駅へ行くと、切符を買うのに駅を二まわり半の行列ができていました。やっとのことで列車に乗れたものの、トイレまで人でギッシリ、子供がオシッコと云っても動けず、窓から子供を出すありさまで、やっとの思いで里に帰り着きました。

そして 8 月 6 日。焼跡の始末をして後からきた主人は、船便待ち（田舎は瀬戸内海の島）で広島駅前の旅館に、たった一泊したために被爆しました。原爆の投下は、遠く瀬戸内海の島でもその光と音に驚かされるほどで、何か異状な事態が起こったことが感じられました。翌日、夫の安否を心配した母が、船に便乗して広島へさがしに行ったのですが、「それはそれは地獄絵だった。とても息子は生きてはいまい」とつぶやいていました。その夫が、包帯でぐるぐる巻きになり戻ってきた時には、足があるのかと目を疑いました。同じ船便

で帰ってきた、女学生は外で作業中に被爆したとかで、目の玉は飛び出て、足はやけぶくれ、痛い痛いと見てられませんでしたが、皆一ヶ月ほどで亡くなってしまいました。

夫はその日テーブルに向かい朝食をとっていました。突然市電のスパークのような青白い光を感じ、気を失っていましたが、たまたま壊れた旅館の下から足が出ていたのを、宿の仲居さんがみつけてひっぱり出してくれたそうです。そのまま、はだしで呉の叔父の家まで行きつきましたが、流れた血が固まって頭も顔も真黒で、誰とも見分けられずオバケかと驚いたと云います。叔父夫婦がつきそって治療をしてもらって、やっと郷里へ帰ってきたのですが、その後も頭から顔からガラスの破片がいくつも出てくる有様でした。夫は、家屋の下敷きになったのが幸いしてか、放射能の直撃は免れたようで、体の不調に悩まされながらも 74 歳の生涯を終えました。足をひっぱり出してくれた、消息のわからぬ命の恩人への感謝の気持ちを胸に抱きつつ、何かでおかえしがしたかったのでしょうか、JRC（青少年赤十字奉仕団）の育成に、ひいては世界平和のためにと、心魂をかたむけておりました。

夫も私も、大阪で広島で、戦争の恐ろしさ、無残さ、口には筆にはあらわしようのない体験を通じて、二度とあのような悲惨な思いを、子供に孫に味わわせてはならないと思っております。

## 自分の人生を自分で生きたい

柳原 章子 大正 11 年生まれ

勝ってくるぞと いさましく ちかって、

家族や親戚や多くの人たちの歓呼の声に送られて、今日もまた

「日本男子の本懐です。」

「お国のためにつくします。」

と挨拶し、車中に征く人、残る人の胸中を去来するものは、日本男子になった満足感、それとも残した家族への不安、それとも一我が家にだけは舞い込まないようにと願望していた赤紙か。

軍の指令には返事はいらぬのだ。ただ実行のみである。

人はかわれど 真心は

みんな一つに 国のため。

今日も四つ角で道を行く人に、一針の真心を、と差し出す千人針、誰が言ったのか弾丸よけの五円玉が……。しっかりと結ってある母の気持ちが、家族の気持ちがこんな形で、どうかこの願いを叶えて下さいと祈らずにはおられない。

ガアー ガアー ザック ザック と黒光りした旋盤が不気味な音を立てて回っている。身の毛立つこのヒヤリーとした空気を 12 歳の少年はどのように受け止めたのだろうか。半人前の少年達が危険と背中合わせをし、昨日までペンを持っていた手が今日よりは旋盤を、撚り糸機械を、向学心に燃える心を、自由がほしい気持ちを学徒動員に封じこめられ、国のために働かねばならないのだ。

戦争という重苦しい屋根がピッタリとおおいかぶさり、軍需優先の統制経済にがっちりとかくられた日本人の生活は、軍事体制へと流されていくのである。軍靴の音が聞こえる、男は前線へ、女は生産へと、男子には兵役を女子には勤労奉仕を義務化し、一枚の赤紙で召集し「万歳、万歳」の歓呼の声で戦場に夫を父を戦地に送った妻や娘達はまた銃後の守りとして、戦地に征った男性達の補充にと挺身隊、学徒動員として軍需工場にとり出された。法的では半人前の人間としながらも銃後には無くてはならない役割りを背負わされるのである。

男だけでなく女達も自分の人生を、自分で生きる力を持たされないのである。

新聞には戦争を謳歌したニュースや若くして散った勇士の美談を、変わった美談として

負傷者との結婚や英霊と結婚してそのまま未亡人となった物語等を、華やかに紙面を賑わし、それが当時の生き様のように報道されると、戦争批判の気持はあっても、聞こえてくる軍靴の行進の波に喜びも悲しみも、そして自由をも飲み込まれる。「欲しがりません、勝つまでは」「ぜいたくは敵だ」の先頭にたって、統制配給の不自由をも自分流に納得し、国のためにと自分の「個」を国家の「個」に変え戦争強化へと足並みを揃えていたのです。衣服も男子は国防色の服に帽子とゲートル、女子はおしゃれはご法度、国民服かモンペを着け、労働力の動員にと組織化され、男も女も個人の権利を完全に無視され決戦遂行の手段に道具にと逆用され本土決戦にとの運命を背負い、一億人が火の玉となって戦場で銃後で戦ったのです。自分の人生を無にして、学者への夢を犠牲にして、ただひたすら一国のために。

神風は吹いてくれなかった。あの軍靴の音も、いずこにか—

多くの人々の思いを、多くの人々の夢を犠牲にして築いてくれたこの平和。

今日も、この平和の光が。

陸軍造兵廠（砲兵工廠）の跡にそびえたつツインビルに、自由の空間で自由を謳歌する若者達が。

チョット時を止めて、昔をふりかえってみてはと、四十余年を偲び、感無量である。

## 懐かしき被爆者戦友会

森井吉太郎 明治 42 年生まれ

閃光一閃、広島、長崎に原爆が投下され、すさまじい熱線と放射能の後遺症を背負いながら激動の昭和も終わり、年号も平成と変わり、西二十一世紀に向って前進のスタートをしました。44 年の歳月が流れるにつれて、被爆者も高齢と病いで年々亡くなり、我々被爆戦友も数少なくなってきました。

私は陸軍第二補充兵でしたが、臨時召集を命ぜられ、海軍兵籍編入主計兵として呉海兵団に入団し、新兵教育を終えて安浦海兵団付第五十六設営隊で広島県上根村根野国民学校に部隊が設地となり、飛行場建設と決まりました。我々主計兵は、設営隊の食糧運搬で無き日は、山に松の根を掘り起こし、松根油の作業です。

その当時お互いに苦労を共にした戦友が各県に居り、毎年書面にて安否を気づかっています。その戦友も年々少なくなってきましたので、神戸市在住の兵曹長の発案で、奈良県の戦友に榛原の美榛苑で戦友会を開催する様に云って来ました。苦労を共にした戦友が東京都に 5 名、近畿地方に 6 名、東海地方に 5 名、中国地方に 3 名、遠くは九州地方に 3 名が事前に打合せ、11 月 18 日近鉄榛原駅に集合しました。

戦争の激しい昭和 19 年頃はお互いに若く張切っておりましたが、生死を共にした戦友も今では高齢になり、一面識では判りにくく、名前を呼びあって健康で握手を交したときは、感慨無量の面持でした。

四季の色が翹う美榛苑の戦友会の宴会は、午後 6 時に始まり、広島県大竹市の戦友が当時の事を思い出し、語り始めました。8 月 6 日朝の点呼を終えて、我々二班の主計兵は輸送車に乗車の寸前、突然空襲警報が鳴ると同時に、広島市内に閃光一閃、爆音と共にきの子雲と黒い煙が立ち昇り、同時に兵舎の壁が落ち、兵長以下その場に身を伏せました。何の爆弾が落とされたか一同見当がつきませんでした。

翌日より設営隊が、市外の寺院に遺体収集作業、障害物の除去作業隊に変わり主計兵も 8 月 9 日より広島市内に入りました。広島市内は原爆熱線で焼けたその死体が男女の区別がつかず、実に目を覆うばかりです。一発の原子爆弾のため、多くの尊い命を奪い、今だにして苦しむ被爆者。当時の事を思うにつけ、今戦争の無い平和に暮らせる尊さをつくづく感じました。

宴会も歌と戦争の語り草で花が咲き、時の経つのも忘れ、夜遅くに終わりました。翌日

美榛苑で別れるのが惜しく、一同揃って多武峰談山神社に参拝し、尽きぬ名残りを惜しみながら、社殿前にて記念写真をとり、又の再会を約束し、一路帰路に着きました。お互いに懐かしい忘れる事の出来ぬ被爆者戦友会でした。

## 私は「地獄」を二回見た

永沢 由松 明治33年生まれ

一回目は大正12年9月1日の関東大震災です。この時は、私が海軍兵学校に勤務中でして、兵学校から関東へ派遣されて、「地獄」を見ました。これは天災でした。

二回目は、昭和20年8月6日に、アメリカ空軍が広島市に原子爆弾を投下して、一瞬にして、広島市は見渡す限り焼野ヶ原になり、そして三十数万が被爆したとも言われている（推定）そのことです。その翌日、私は義弟と二人で広島市宇品に居る義兄の安否を尋ねた所、義兄は全身大火傷だから、軍の救護所へ行った方が良くと近所の人に連れて行かれたとの事で、その後の事は何もわからなかった。とにかく捜す事にして家を出た。御幸橋近くまで行くと、道路は電柱が倒れて電線が蜘蛛の巣の如く、建物の残がいなんかで、歩くのも困難をきわめた。そして至る所に人間が転がっていて、まだ生きている人もいたがどうも出来なかった。人間だけではなく、牛や馬の死体も、いくつも見つめた。又、川にはたくさんの死体が浮いていた。コンクリート建ての中にも入って見たら、まだ生きている人がいたので、話しかけてみたが、その人はなにも言わずに、私の顔を見るだけでした。電車も焼けて、鉄骨だけが残っていた。市中を歩く人も、ほんの少しだけだった。空にはアメリカの飛行機が、8機編隊で、悠々と東へ行った。後は又、地獄の静けさになった。

靴が焼けつくように熱い。何度もぬいで風を入れた。のどが渇くが、飲む水は見つからなかった。焼野ヶ原を歩くのも苦しかった。義兄の娘は、女学校から勤労奉仕で、市内で作業中に、顔と手足に被爆しているので、私がつれて帰り、海軍兵学校で軍医に手当をして頂いたが、その甲斐も無く死亡しました。

それから早くも44年になる今日でも、原爆の後遺症で苦しんでいる人が数十万人もいる現状です。次代を担う皆さん、二度と被爆者をつくらないために、一日も早く世界各国に、核実験を止めさせて、今後は核兵器を造らないように呼びかけましょう。

世界人類のために頑張りましょう。

89歳の老人の願いです。

## 戦争と原爆

小松 朗 大正 13 年生まれ

私達の子孫に二度と戦争を起こしてはならない、戦争の経験はこのオジイサンだけで結構と、何時も笑顔で抱かれている孫を見らると思う。

今やこの小さな島国日本も、経済力世界二位とか、物品美食に恵まれ、平和に過ごしているが、その陰には、今も戦後の終わっていない気の毒な方も沢山いる。中国残留孤児とか南の小さな島に旧日本兵が、今だに平和を知らず取り残されている。又、ピカドンから四十数年も過ぎた今日、今だに被爆犠牲者が後遺症と闘い、幸福を見ずにこの世を去って行く人は毎日の様です。

私達生き残った者、平和で過ごしている私達は、戦争の犠牲者又は遺族の方に、国の責任においても援助の手を差し伸べる様に政府に働きかけると同時に戦争の恐ろしさ悲惨さをこの目で見、感じたるを四十数年昔の、頭の毛も心淋しくなったこの頭同様、薄れた記憶をたどりながら、筆を取り上げました。

私は昭和 19 年 11 月 10 日山口県下の西部六連隊より広島駅より南 1 キロ位の所に小高い今の比治山公園下の暁船舶通信隊に転属され、主に通信教育を受けていました。その時分は、戦いも我に利なしの状況で年が明けると、益々不利となり、沖縄は敵中に陥落、いよいよ本土決戦となり、大型爆撃機 B29 が東京を始め、大阪、名古屋、北九州と空爆を続け、私達広島周辺も空襲、岩国、糸崎、呉と連夜の如し、特に呉は、私達部隊から宇品港に向って良く見え、艦載機が鳥の群れの如く次々と急降下して、夜間には摺鉢の中が燃えているかの如く赤く、手にとる様に見えました。

私達中隊三班もどんな理由か解りませんが 8 月 4 日広島より西にある二十日市のお寺に疎開し、それが命拾いになったのかもしれませんが。丁度 8 月 6 日ピカドン当日もいつもの朝の点呼も終り、初年兵二人とリヤカーを引いて広島市内の暁本隊に食糧を受取りに向いました。朝の 8 時 15 分突然ピカピカと光が波紋形に走ると同時に、ズルズルと大地が揺れる様な音がし、私達は兵隊の本能として大地に伏せ数秒後起き上がって見ると、前方に大きな子雲が真白に見事に又不気味に大地より突き上がっているではありませんか。一時は火薬庫でも爆発したのではないかと思いましたが、町の様子も慌ただしくなり、私達は直ぐ班に引き返しました。

班では広島に爆弾投下の為、救援隊として出動する様指令があり、私達はそのままトラ

ックに飛び乗り広島に向いました。爆心地に近づくに従って、荷馬車が道の真中に倒れているし、被爆者は真黒に焼け、左右ヨロメキながら歩いて車も通れない。途中徒歩にて他の救援隊に合流して、直ちに救援活動に入りました。

入る迄、又入ってからもこの世にこんな事があるのだろうかと思う様な生き地獄で、早速、私達は道路脇に幾つもテントを張り、中にはムシロを敷いて、タンカで次々と被爆者を運び入れ、テントの中はみる間にまるで黒い丸太でも並べた様で、これが人間かと思いました。悪臭と呻き声の中、若い軍医が治療に当り、治療と言えばアカチンかクレゾールを塗るくらいで、包帯一つない有様です。ついにはそのアカチンでさえなく真夏の事ではあるし、翌日には傷口よりウジ虫が顔に迄這い出し、私達はそのウジ虫一つ取る事も、忙しさと命令一つで動く軍人の身で出来ません。そのうちテントの反対側では生き絶えた死体が運び出され、まるでトコロテンの押し出しの様なものでした。人の命も虫ケラの如く、こんなに軽々思った事はありません。私達は、連日救援、死体片付けを四日間続けましたが、幽霊の如く女の人（と思う）が片足にしがみつき、無言のまま生き絶えた人、幼い子を背負い大地に這う様近づいた若い母親がこの子を助けて下さいと、指差す背中の子は既に死んでいた事、家の下敷の中、親子シッカリと手を握り締め死んでいる姿、母ちゃんと言って泣き叫びながら、母を求めている小さな男の子。

書けば枚数も尽きないので省略しますが、最後に戦争で亡くなった方の冥福を祈ると共に、私達は皆様の死は決して無駄にはしません。反核反戦の都市の市民と共に、二度と戦争を起こさない様誓いまして筆を止めます。

# 十五年戦争を生き抜いて

山崎 武一 大正4年生まれ

昭和12年7月北京郊外盧溝橋付近で日、支両軍の衝突が支那事変の発端となったとき、広島工兵第五連隊で初年兵の私らにすぐ動員下令、独立工兵第六連隊に編入され、8月10日北支那に向け、宇品港を出航した。翌朝早く関門海峡を通り、玄海灘を西航し、北九州が見えなくなると父母姉妹を思って心中泣した。

2日後、太沽沖に投錨したら二ヶ中隊は上陸し、私らの中隊は中支那に転進を命ぜられて、舟山列島に向かい、第三、第十一師団と一緒に、8月23日払暁、揚子江南岸川沙鎮に敵前上陸を行った。

私達の部隊は戦闘は従で、上陸戦闘に舟艇を操縦し、兵員、兵器、弾薬等の上陸が主で、揚陸時に敵の攻撃を最も受け易い。あわせて私がいた隊は、この舟艇を陸軍の特殊輸送船で、泊地侵入と共に揚重機を操作し、積み下ろし積み込み作業を受け持った。

上陸地が決まれば、航空機により偵察を行い、要すれば爆撃し、直前に艦砲射撃、高速艦艇により煙幕展張して上陸部隊の陸地達着までの隠ぺい、部隊が上陸展開し、橋頭堡の確保が大筋である。

次いで、9月1日呉沫鎮付近の上陸戦闘に加わり、上陸部隊の獅子林、呉沫砲台の占領により、黄浦江の通行が可能になり、これを遡り9月2日夕刻、上海揚樹浦北の碼頭に接岸し、機器兵員の上陸を終わり、3日朝黄浦江を下った。船上より朝靄に煙る兩岸を望むと、空爆、砲撃により建物は未だ燃え、土地、建物、樹木は破壊され、傷跡は深く、水辺には死体が無数に浮かんで流れ、当時敵ながら無残というべきか、その言葉を知らなかった。

乗った船が命令待ちに呉沫碼頭に繫留中、中国人が手漕ぎの傳馬船で舷側に来て物をねだる様なので、配分された飯缶の残飯を3、4集めて与えたら、言葉は通じないが「老師」や「謝々」の意はわかった。

戦火の拡大につれ、11月5日杭州湾に、11月13日白茆口付近に敵前上陸し、南京への追撃戦を、翌13年10月12日南支白耶士湾に、10月23日虎門要塞付近に。年を越えて14年2月11日、海南島澄邁湾に敵前上陸を行った。

上陸したら隊に伝染病患者が相前後して6名も出て、私も腸チフスで五ヶ月入院し助かった。

10月になり、当時重慶に対し佛印ルート遮断の計画発動で、南寧攻略のため11月15日、

東京湾の北方欽州湾に第二十一軍の敵前上陸に加わった。

この日風強く波高く、舟艇の泛水も輸送船から移乗も困難を極めた。

龍門の海峡を通りぬけ、欽江を遡り、欽県の兵站基地へ輸送を行った。同年暮れから15年2月にかけて、南寧付近の我が軍に救援の補給輸送も行った。この時現地米を炊き調味料に粉醤油、粉味噌を用いたが、食物は喉を通り難かった。

11月12日より12月2日に掛け、我が軍の南寧撤退にあたり、欽県より欽江を下り龍門沖の輸送船までピストン輸送を独立工兵第十四連隊と行い1名の事故もなく終わった。

そして16年7月6日私達11年徴集兵は四年余の戦地暮らしを終えて補充隊に帰還した。

去る12年1月、20名の若者が工兵第五連隊三中隊に入営し、事変のため戦場に赴き思わぬ長期になり、その間不運にも戦死や病魔に倒れ戦傷者、再役志願者を除き、73名が復員し、幸に私もそこ中に居た。

続いて勃発した太平洋戦争には、もとい軍需工場に復職していたので、召集は遅かった。工場では製造中の上陸用舟艇、機関車、ボイラー等戦局の逼迫に伴って納期の確保や繰り上げを厳しく要求されても、資材不足、粗悪化は次第に甚だしく、製品に跳返り、芋粉の団子を食べ、連日深夜まで残業しても能率は上がらず、勤労学生、応徴士の来援も防空演習が空襲警報になるにつれ減少し、増産はできず次第に減産となった。

20年3月13日の晩は工場宿直であった。B29による大阪に対する第一回目の大空襲には、自宅も工場も爆撃を受けず。1日おいて次の15日、召集令状が来た旨電報があり、急遽帰郷し、両親らに別れて、3月20日和歌山船舶工兵第九連隊補充隊に入隊し、今度は本部教育室勤務となった。

8月6日広島市に原爆が落ち、兵団司令部から救護隊派遣の命令あり、私もその中に加えられた。8月15日終戦、9月8日部隊解散になり帰阪した。

顧みて、吾が人生二十代は戦争に明け暮れて、四十代半ばまでは戦後の復興の掛け声に真黒になって工場で働き続け、69歳一杯まで勤めた。年老いた今、現在の平和が何時までも続く様に日々祈念するだけである。

## 広島近郊にて

平田紀美子 昭和 15 年生まれ

### 空襲警報

夏休みが始まってもう半月以上が経った。

昨日に引き続き朝から快晴でぎらぎら照りつける太陽はもう南の空にあった。裕介が起きたときは父母はもうはるかうえの畑でいもの蔓を返しながら、うねの土よせをしていた。

裕介の朝のうちの日課は、家の周りの掃除を済ませ、宿題をして、三つ年下の妹の愛を遊ばせてから父母の働く畑や山にお茶をもって行く事であり、今日はまだ妹は起きたばかりで、祖母のひぎのうえで朝食の最中だ。

掃除の終わったときには、流れる汗が着たきりのぼろシャツを雑巾のように濡らしていた。

家の前の古井戸でつるべを操り、たらいに満たした冷水で体を拭き始めたとき、村の郵便局のサイレンが鳴った。

空襲警報だった。幼い裕介にも、警戒警報と、空襲警報の区別はついた。一年生になったばかりだが、学校では「サイタ サイタ サクラガサイタ」程度の勉強のほかは、来る日も来る日も防空演習である。自然と警報の区別も身についてくるのは当然であった。

広島から二里半の山の中では、防空演習はするが実際に空襲にあったこともなく、実際に乏しい状態であり、したがって警戒警報はいままで何度かあるにはあったが、空襲警報はかつてなかったことだけに、裕介は、子供心に胸の引き締まる思いで空を見上げた。

南の空は呉の上空、西の空は広島の上空と教えられていた。

その南の空に巨大なまっ黒い爆撃機が見えた。それは引き続き西の空へと腹に響く爆音を残しながらゆっくり移動していく。

「おばあさん、ありゃ広島へ行くんかの？」「爆弾落とすじゃろうか？」裕介の叫び声に、祖母は同じように空を眺め「こりゃあほんまじゃ、いべせえのう・・・」と家に駆け込み仏壇に手を合わせてお経を唱え始めた。

(注・いべせえ＝広島の方言で【恐ろしい・こわい】こと)

裕介は、いつも父母から「空襲で危ないときは、前の横穴に入れ。家に居るものも全部入るように言いなさい・・・」と言われていることを思い出し、まず妹を抱えるようにしてその防空壕へいれ、仏間にいる祖母に「おばあさん、防空壕へはいりんさいや、敵機が

来とるし、爆弾でも落とされたら事じゃけん・・・」と着物のたもとをひっぱった。

「ほっとしてくれんさい！わしゃあこの家へ嫁に来たんじゃけん、この家で死んでもええんじゃ。防空壕なんかにははいらんけん・・・」

このころの祖母は、今でいう老人性痴呆の症状が出始めていた。

そのとき、一瞬だが、目の眩むような閃光があった。

息が止まるような爆風が押し寄せた。耳をつんざくような轟音が走った。祖母は、それを境に声をはりあげて更に激しく読経を繰り返した。

西の空には、火柱か何かのようなまっ赤に染めたきのこ状の雲がもくもくと立ちのぼり、ようやく外に飛び出した近所の人々も、皆同じ方向に目を向けしばし呆然とたたずんでいた。

## 誤報

家にとって返した裕介は、ふと居間の時計を見た。裕介の日課の一つでもある時計のねじ巻きは、三日に一度となっており、この日課を忘れたことなどなかったから、時計は多少の遅れが出ることはあっても、止まることはなかった。しかし、時計は完全に止まっていた。

8時15分であった。

父母も、何だかよく分からないまま、ただ事でない気配に、畑仕事を中断して帰って来た。

「大原じゃろうか？」【注・大原は地名で、広島県安佐郡福木村＝今の広島市東区福田＝のほぼ中央の大字大原に（裕介の家から約1キロメートル西）に陸軍の練兵場があったので、この軍事施設がやられてもおかしくない背景があった。】

父はまだ何の情報もない事を不安に思いながら、小さな体を背伸びするように西の空を見詰めていた。

やがてぼつぼつ情報がとぎれとぎれではあるが入り始めた。

それによると、広島に新型爆弾が投下されたい。そして広島は壊滅状態らしい。軍のトラックで続々怪我人が運んで来られているらしい。

父親の淳蔵は、手伝いのために学校へ行こうと土間で立ったまま早めの昼食を取りはじめたそのときである。

「三谷さん・・・あんた方の兄ちゃんがおおやけどを負って学校の講堂に寝かされとりん

さるで！早よう行ったげんさいや！」隣の川岸さんのおばあさんが駆け込んで来た。

「兄ちゃんゆうて、達郎のことか？」父親は聞き返した。

「そうよ！達ちゃんじゃが！」

「ほいでも、達郎は今朝は山に行く言うて出て行ったんじゃがのう……。広島なんかにやいっとりゃせんで……」「わしのこの目で見て来たんじゃけえ、まちがいはせんよう」

この話を聞いて、父親は【絶対に何かの間違い】と思いつつも何かしら胸の騒ぐものを感じ、慌てて身繕いを済ませて裕介の手を取り愛を片腕にだきかかえ学校へと急いだ。後に母親の恵が急ぎ足で追いかけたのは言うまでもない。

既に学校は、軍のトラックで運ばれて来た怪我人で満杯の状態にあった。講堂は言うに及ばず、各教室も机が整理されそれこそ足の踏場もない状態に負傷者が並べられていた。

それは夥しい数にのぼった。

川岸さんが案内してくれた場所には、そう言われればそうともみえる若いひとが横たわっていた。しかし、父親の目で見るとかぎり、似てもにつかぬ全くの別人であった。

「あんたあ、名前は？」と父親の淳蔵が聞くが返事もできず、ただ宙の一点を見据えるだけでじっとしている。

よく見れば、顔の皮膚は水泡で腫れ上がり、どこかで引っ搔いたのか一部が破れ、赤い肉がぶよぶよに浮いて見える。その他の部分も、殆ど大やけどを負い、もう声すら出せない瀕死の重傷であった。それはその人のみではなく、殆どの人がそうであった。

むしろ、軽症で話をしている人、ものが言える人の方が少なく、まさに地獄絵をみているようであった。

国防婦人会の人々の奉仕活動はすでに始まっていたが、薬や痛み止めの注射は皆無にひとしく、なす術もなく、せめて「熱いよう。」と泣き叫ぶ人に、手拭いを冷水にひたして絞り、熱いところへのせてやるだけであった。

また、むしように喉の渇きを訴え「水……みず……ミズ……」と叫ぶ人達に学校の水のみ場から汲んできた冷たい水を少しずつ飲ませてやるだけであった。

目の前で、ひとり、また、ひとり息を引きとっていく、本当にどうにかしてやりたくても、手のほどこしようがなく、みんなただ呆然としてその光景を見ていた。

講堂は次第に死臭が漂い始め、父は我に返り慌てて裕介に愛の手を握らせ、「あんちゃんじゃなかったけえよかった、良かった。愛を連れてかえっときんさい。」恐らくこの地獄絵を幼い子供達に見せたくなかったのであろう。

しかし、裕介も愛ももうすべてを見てしまっていた。

人が死ぬのを見るのもましてやこれほど夥しい死人を見るのも勿論始めてのことであり、口もきけないほど怯えていた。

校庭に出て更に驚いた。

一つは軍の将校が指令して死亡した人達を教室からかつぎだし、校庭の隅に積み上げて行った。ボタ山のように幾つも幾つも山ができた。

そしていまひとつは、校庭では更に広島から連れられて来られた新たな負傷者が降ろされて行く。

いずれも既にトラックで運ばれる最中になくなっている人も多く、それはそのまま死体置き場にまわされ、見る間にボタ山が増えて行った。

名前も住所も分かっている人は殆どなかった。

陸軍練兵場の兵隊さん達も、総出でこの処理に当たっていた。

既に【物体】と化した遺体をまたトラックに乗せた。それも全く無造作に放り投げるように積み込んだ。

練兵場では既に大きな穴が掘られていた。

学校から運ばれた夥しい数の遺体を、またその穴の中に積み上げていった。

人玉

妹の愛は、兄のベルトにつかまりながら「あがいによけいにどうして死んじゃったん・・・」  
「知らん、広島にいなげな爆弾が落ちたんじゃと」それっきり二人とも黙ったままで家路を急いだ。

【川岸のおばあさんが知らせてくれたのが間違いでよかった】裕介も子供心にそう思った。

西の空は先程までの真っ赤なそれからどす黒いものになり、全体がどんよりとして朝の青い空はどこに行ったのか、まだ3時を過ぎたところなのに、既に夕暮れのごとくうす暗くなっていた。

その暗い空が再び赤く燃え始め、夜おそくまで空を焦がした。

裕介も後で知ったが、それは軍隊がああ夥しい死体を大原の練兵場でガソリンをかけ処理したものであった。

その夜、多くの人達が人玉の飛び交うのを見たという。

父も母も、その夜はおそくまで奉仕をしていた。炊き出し、負傷者の確認や手当、やることは幾らでもあった。

広島では熱さのあまり水を求めて飛び込んだ人で、あれだけ幾条にも流れている川が真っ黒になったと伝えられた。

この小さな村にでも、これだけの負傷者や死体が運ばれて来ている。

当然あの広い広島市内では恐らくこの何百倍ものひとたちが、もがき、苦しみながら死んで行ったことだろう。

その様は、当然ここで見る数倍の惨状であったろう。

こうして、1945年8月6日の長い一日は終わった。

父淳蔵も母恵も、次の日もその次の日も学校に通って、【むごい・・・痛ましい】を繰り返しながら奉仕を続けた。

淳蔵はピカッと光りドンと鳴ったときから、市内に二人いる兄たちのことは気になっていた。しかし、搜索のため広島に出ると言い出したのは、爆弾投下の四日後になってからだった。

父の二人の兄は、この爆弾が投下されたときをもって消息を絶った。未だに不明である。

## 私の被爆体験記

萬木 梅子 大正3年生まれ

当時、広島市の市街地も空襲に備えて疎開する家が多く、火災を防ぐ目的で空き家を取り壊すために、大竹町や三ツ石、小方など五つの町から勤労奉仕を募っていました。

その日は、私も他の方達と一緒に早朝から電車に乗り己斐（こい）駅（今の西広島駅）に着いたのは8時をちょっと過ぎていたと思います。

駅を出たとたんサイレンが鳴り、飛行機の音が聞こえてきたのでみんなが、目的地（爆心地付近）に向かって走り出したところ、突然「ピカッ」と閃光が走り、あたり一面が紫色に変わりました。ちょうど付け木（木片の先にいおうをつけたもので火を移す時に使う）の炎のようでした。

「あっ、顔が熱い」と感じ、目の前にあった小川に下り、水をすくい顔を洗ったところ手には顔の皮膚がべったりと付き、よく見ると手の皮もはがれていました。

あまりのショックからかその時には、痛みも何も感じませんでした。

ただ心は「母や子供達は怎么样了か」という不安でいっぱいでした。

一刻も早く子供達の所へ帰らなければと思い、ふと横を見ると服がほとんど焼けてしまい裸同然でひどい傷を受けている人がいたので、自分の持っていた着替えの服を着せてやり背負いました。

己斐駅まで戻りましたが、頭の上を艦載機が飛んでおり恐ろしくてたまらず芋畑に入ったものでした。

しかし、少しでも大竹の近くまで行こうと必死で進みました。

途中では、防空壕に身体が半分だけ入ったままで死んでいる人や、半死の状態で、「おかあさん、おかあさん」と呼んでいる子供もおり、思わず手を合わせたものです。

ようやく五日市のあたりまで来た時「梅子、梅子」と呼ぶ兄の声に我に返った思いがしました。

そしてふと我が身を見ると、着ていた服もモンペもボロボロになっていました。

麻の服を着ていたので燃えずに済んだのだと思います。

五日市には、大竹から救援のトラックが来ましたのでそれに乗り大竹まで帰りました。

幸い大竹は何の被害もなく、母も子供達も全員無事でほっとしました。

私の火傷は、思ったよりひどく、そのため私だけが妹の家で面倒をみてもらうことにな

りました。

その当時は、薬も思ったように手には入りませんでした。妹は、苦勞して軍より、亜鉛華（医療用で酸化亜鉛の白い粉）と食用油をたくさんもらって来てくれ、それを混ぜ合わせて、毎日私の顔や手に塗ってくれました。

おかげで傷は、三ヶ月程でほとんど治り、傷跡も残らずに済みました。

しかし私たちにとってはそれからの生活が大変でした。

いつまでも実家や妹の家の世話になるわけにもいきません。なかなか連絡がとれなかった夫からは、被爆後二回程はお金を届けてもらいましたが、仕事の関係ですぐに大阪に戻って行きました。

そのお金とてたくさんあるわけではなく、すぐになくなりました。

実家の近くに家を借り暮らすようになりましたが、食べてゆくためには働かなければなりません。

しかし仕事を探しても、当時は、原爆がうつるといってどこも雇ってはくれませんでした。

仕方なく、上の二人の息子と共に実家（米屋）の仕事を手伝い食いつなぎましたが、一合の米をもらうにも気兼ねをしなければならない状態でした。そんな状態が4年程続き、ようやく大阪に戻り、一家で暮らすようになりしました。

しかし長年の苦勞から夫は結核にかかり寝たきりの状態になり、子供たちも次々と結核にかかったため、夫を病院に入院させ、子供たちは近所の医院で診療を受けさせました。

一家の生活を支えるため、私は、着物や服の手間仕事をもらい一生懸命働きましたが、いくらにもならず三日も水だけで過ごした時もありました。

長男、次男も働いてはいましたが、8人の家族の生活と治療費を賄うことは困難で、二人ともぐれて家を飛び出し、今も音信がありません。

考えてみると、息子だけが悪いのではなく、一家の生活を壊してしまった戦争の影響がこんな形でも出ているのだと思います。

10年間寝たきりの療養生活を送った末、夫は昭和34年に亡くなりました。その時も私には、夫の遺体を引き取りに行くのに着ていく服もない、どん底の生活が続いていました。

夫が亡くなって以後も苦しい生活が続きましたが、下の子供たちがだんだんと働き始めるようになり、何とか生活も安定するようになると、今度は、私に被爆の後遺症が出はじめました。そして一時は、白血病で死の淵をさまよったこともあります。幸いにも病院

での治療の結果、九死に一生を得ました。

しかし今でも、三ヶ月に一度は検査を受けなければならず、その上時々、体に黒い大きな斑点が出る状態です。

現在は、末の息子家族と一緒に暮らしていますがみんな私のことを大事にしてくれますのでありがたく思っています。

戦後 40 年をこえても、私にとって、戦争はいまだ終わってはいません。

被爆当時の地獄絵のような惨状は、目に焼き付いてはなれず、とても映画や言葉で表しきれものではありません。

被爆の後遺症は、今も私を苦しめています。

最後に私は、戦争を、そして被爆を体験した者として、戦争というものを実際に知らない人たちに、戦争の愚かさを知って欲しいと思います。

犠牲になるのは、いつも私たち国民です。

お国のためと喜んで死んでいった人などだれもいないと思います。

みんな親兄弟や子供に断ち切れぬ思いを残しながら死んでいったことでしょう。

孫たちの顔をみるにつけ、この子らを私と同じような目には決してあわせたくないと思います。

人の命を一枚の紙切れより軽くするような戦争は、二度とさせてはいけないのです。

## 被爆当時を記憶のままに四十五周年の今

北川 静恵 大正 15 年生まれ

間もなく被爆四十五周年を迎えようとしている。昭和 20 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分長崎に原爆投下される。私も被爆者の一人としてあの悲惨な地獄絵図が脳裏に焼きついて忘れる事が出来ない。その前から戦争も激しくなり長崎上空を敵機が通過する日が多くなりはじめていた。8 月 8 日は長崎一帯が灰の町になるという情報に毎日空襲に怯えている市民は 7 日の夜から指定の防空壕に避難し始めた。だが壕の周辺は軍部が網を張り老人と子供以外の人は一になるまで戦えとの命令で皆帰されてしまった。

当時、ほとんどの男性は、赤紙一枚の召集礼状で入隊させられ残された老人と女性は防空訓練、竹槍の訓練を毎日させられて、夜は床下の防空壕の中で銃声の轟音に怯えながらの生活であった。8 月 8 日も皆緊張して警戒に当たっていたが、夜になっても銃声一回も聞こえず一日が過ぎてしまい、情報はデマだったのかと皆安堵の胸を撫で下ろして、9 日の朝を迎えた。雲一つない晴天に昨日の緊張もいくらか和らいでいる矢先であった。いきなり敵機来襲の鐘とサイレンが鳴り響き、静かな朝が一変してしまった。外に飛び出して見ると雲一つない上空を B29 の敵機が翼をキラキラさせながら飛んでいた。やがて空襲警報も発令されたので皆仕事を止め壕に避難した。今日が灰の町になるのではと、恐怖に怯えながらも皆無言のまま、サイレンと半鐘はずっと鳴り続けていたが、間もなく警報が解除になったので仕事に戻った。郵便局に用事が出来た私は事務所を出て、その帰る途中「ピカッ」と異様な光が走ったので、一瞬焼夷弾と思って家に入れてもらおうとガラス戸に手をやった時「ドカン」と強烈な音と共に家が倒れて、みるみる内に一面真暗闇になってしまい、私はあまりの突然に何が起きたのかと只、呆然と立ち竦んでしまいました。

暗闇の中では家族を呼び合う声が方々から聞こえて騒がしくなってきた。しばらくして少しずつ視界が見える様になった頃、警防団の方が早く避難する様に叫んできたので、私も事務所に帰りかけたが建物が倒れて道路も歩けないほどであった。みんな指定の防空壕に避難する様にいわれたので人の後ろについて走っていたら、「貴女は救護所に行きなさい、早く行きなさい」と警防団の人に云われたので気がついて見ると白のブラウスが血で真赤になっていた。びっくりして救護所に行って見ると爆風で飛ばされたり放射能に当たって焼けただれて大怪我をしている人が次から次と運ばれてきて、仮の救護所はごったがえしであった。血がたくさん出ていたけど傷は大したことがなかったので指定の壕まで夢中で

走った。壕についた途端嘔気がして戻した。外で被爆したので悪い物を吸い込んだらしく後になりその時戻したのが良かったのだと聞かされびっくりした。

夕方頃より方々から火災が起こり忽ち火の海となり夜空は真赤になり、不気味に照らされていた。待機していた消防車も爆風で潰され使用出来ず又消火に当たる人もいなかった。火は容赦なく燃え広がり翌日までくすぶっていた。みんな自分の家の焼け跡を見に下りたので私も一緒に行った。下宿も事務所も皆焼けてしまって町一面が本当に灰の町になっていた。焼け残ったコンクリートの塀には無事で避難しているからと数人の名前が書かれていて床下の防空壕に入れていた荷物は全部蒸し焼きになっていて使用出来る物は一つもなかった。

私は五島列島から来崎して法律事務所に勤めていたのですが焼けて住む所がなく帰る事も出来なかった。その頃海には機雷がたくさん沈んでいて客船の航海はストップのままになっていた。それで町内の人達と私は壕で生活する様になり夜は土の上に板を置いて横になるだけだった。壕の周囲が公園になっていたので何時の間にか爆心地から大勢の火傷した人を運んで来て足の踏み場もない住まいに寝かされていた。ほとんどの人が身体全体焼けただれてその傷の上に赤と白の薬をつけているだけで男女の区別もつかないほどで、恐くて夜はお手洗いにも行けなかった。そんな重傷の人を寝かせる家もなく夜も外に寝かされていた。意識のある人はかすかな声で水々といっておりましたが、一人二人と息を引き取り夜明け頃にはその声も聞こえなくなっていた。身元の分からない人は皆集めて空地で火葬されていた。その煙が壕の中まで入って来て眠れない夜もあった。

空腹を感じた頃に田舎の方からおにぎりが届きましたが、真夏の暑さで悪くなっていたがっかりした。軍部の方からカンパンが届いたのは大分してからだった。着替もなかったので投下4日目に長崎駅から3つ目の駅の長与と云う所まで預けていた衣類を取りに行った。負傷者以外の人には汽車に乗せてくれないので知人と二人で歩いて行く事にした。一面焼野原で道路も分からなかった。爆心地近くになると黒こげになった死体がまだ整理が出来ず山積みになっていた。爆心地に来て原爆の凄さ又恐さが想像以上で書き表す事も出来ない。まだ見つからない肉親の名前を呼んで探している人も大勢いた。悪臭もひどくなり、ウジ虫もたくさんわいていた。馬も大きくふくらんで何頭も死んでいた。又投下のショックで頭がおかしくなったあるおばあさんは動物の肉の切端を懐に入れてサイレンが鳴る度にお腹が空いたと云って出して食べていた。本当に地獄絵その物であった。

悪臭と暑さで二人共気分が悪くなったので線路を歩く事にした。まだ終戦になっていな

かったので敵機が低空で飛んで来ては、私達も此処で死ぬのではないかと恐くなり島の中に何回も隠れた。数日後五島に船が出る事を聞き早速手続きして帰る事が出来た。一緒に帰った幼友達姉妹は、数日後熱が出て頭の毛が抜けてしまっていて亡くなられ可哀想に思えた。

広島長崎の原爆にあった人ばかりでなく日本全国至る所で空襲にあって苦しんでいる人が大勢いると思う。戦争体験者の人も年々高齢化し、今もその後遺症に苦しみながら生きている人がほとんどである。戦争を知らない人は、戦争の苦しみ、恐さ、悲しみ等、分からないと思うが、今こそ全世界に戦争反対と核兵器の廃絶を訴えるべきである。そして、戦争を二度とくり返してはならないと声を大にして叫び、世界中が平和である事を念願すべきこの頃である。

## 関東軍哀史

今泉 良三 大正 10 年生まれ

### (1) 8月9日

昭和 20 年 8 月 9 日未明、「非常呼集」の声に目がさめる。日ソ中立条約を一方的に破棄し、宣戦を布告したソ連は、強大な機動力を駆って一気に国境を突破してきた。

私達第二十九対空無線加藤分隊 8 名は、平安鎮の飛行場大隊に協力のため無線室を開設していた。ソ連軍戦車接近の報に、大隊は死守玉砕を決意、交戦の準備を固め我々分隊も重要書類を焼却する。兵器資材も乏しい関東軍、あるものは肉弾のみ。生を受けて 25 年いよいよ最期の時が来たのか？認識票の紐をたしかめ母の写真を軍服のポケットにしっかりと入れる。一瞬の恐怖が去り、心にゆとりと安らぎが湧く。突然大隊長より命令がくだる。

「派遣隊は本隊に復帰せよ」と。ただちに無線室を撤収。大隊の徴用馬車に機材を積み夕暮れの平安鎮を後に、一路白城子の本隊に徒歩行軍を開始。大隊将兵の武運を祈りつつ、行軍途中から雲行きが変わりボツボツと雨が降り始め、やがて激しい雨となる。先ず大切な無線機をぬれぬ様に注意。人も馬もずぶぬれの行軍となり、車輪はぬかるみにめりこみ気があせるばかりである。とっぷりと暮れた大陸の平野は無気味に静まり、時折けたたましい野犬の群れが吠える。黙々と白城子への行軍はつづく。夜も白みかけた頃、雨も去りある小さな駅に着く。日本人の駅員が一人食事をしていた。我々一行に「行軍よりも興安からの最終貨車に乗り一刻も早く任務を全うしてくれ」との言葉に従う事にする。白城子に到着。本隊と合流。部隊は命令により奉天飛行場に向かう。14 日夕方奉天着、一夜を明かす。

### (2) 終戦

翌朝下士官、兵等 5 名が貨車にて糧秣受領に向かう。街中は騒然たる雰囲気で銃声がはっきりなしに聞こえる。邦人から天皇の玉音放送があり、日本は負けたときく。私は身体から魂が抜けた様に愕然となる。

荒々と一夜は明けぬ敗戦の不気味に立てる着剣の兵

9 月上旬武装解除の後、復員との事で奉天を出発。中国人の冷やかしと罵声。朝鮮人の女の嬌声がとぶ。「マーラカピー」見覚えのある駅、街、広野。改めて満州の広大さを見せつ

けられる。9月中旬黒河に到着。秋の陽はつるべ落しに暮れ風雨が荒れていた。明日対岸のソ領に入ると命令が出る。江上の下弦の月は寂しく冷たい。

### (3) 騙された日本将兵

翌日黒龍江を渡り「ブラゴエチエンスク」に上陸。ソ連の廃車のような貨車に詰められ、表から施錠。汽車は不安をのせ北上。進行方向が東に向かえばウラジオストック。西ならば捕虜。夕日に向かって進むにつれ私たちの運命は決定づけられた。即ち捕虜である。復員の期待は破れる。

それから4年。シベリアに、中央アジアに収容され、飢えと寒さ、強制労働に耐え、やっとのことで祖国の土をふむ事が出来ましたが、栄養失調等で死んだ友、今もあの悪夢は脳裡から消えません。

### (4) あとがき

現在日本の繁栄が戦火の悲劇を消し去れば、あとには平和の祭典が残り、護国のために尊い命をすてた、陸海軍の将兵達、残酷なソ連の強制労働に倒れ、永遠に祖国に還る事の出来ない数万の恨みも消し去るでしょう。

各国はそれぞれ異なった歴史、風習をもち、又異なった主張があり、これらがすべて平和的に解決される確証はありません。故に世界各地で武力紛争が発生しています。我々は太平洋戦争を通じ何を学んだのだろうか。得たものは、国益「ナショナルインタレスト」の教訓だけだろうか。戦争の苦しみと犠牲は善良なる国民にあったのではなかろうか。勝者も又敗者も、繰り返してはならない悲惨な戦争。世界人類が手を結び互いに理解し助け合い、まことの世界平和の訪れをひたすら祈り、戦争を知らない世代の人々のために、これを綴りました。

## 外地にて戦後の生活記

田島 しげの 大正元年生まれ

戦後四十余年の月日が流れました。広島や長崎の被爆は、新聞、テレビで、未だ忘れないでしょう。外地で日本人が経験した恐怖と飢えの、生活を知る人は一部で、その人々も亡くなりつつあります。

昭和 20 年 8 月 15 日終戦。外地に住む日本人は、この日から苦労の連続。主人は、北朝鮮鉄道に勤務。8 月 21 日、ロシア兵 2 人が、現地の職員 5 人ほど連れて、銃を向けながら日本人を一室に集めて、「戦争に負けたのだ。この鉄道を朝鮮人に気持ち良く渡すかどうか。」「ハイ。渡します」の一言で、簡単な引継ぎが終わると、「日本人には用はない、勤務するな。」

又、高等女学校で兵隊さんの配給を貰いに行き、運動場に並ぶ武器を見て、敗戦の淋しさを感じる。毛布とカヤの前に 2 人兵隊さんがいて「早く持って行って下さい。3 時からロシア兵に引き渡す事になっています。時間があつたら、又来て下さい」と、涙声で言う。5 枚の毛布を貰って喜んだのも 4、5 日です。兵隊から貰った物は、公民館に持って来いと言われ全部返しました。その後現地人が使用しました。又リヤカーで日本人の家に来て、包丁をはじめ先のとがっている物は果物ナイフまで持ってゆきましたが、野菜包丁だけは残してくれました。

無職でしたが、お米に替える物資が沢山有る故に、気楽に引き揚げを待てると思っていました。9 月 14 日の回覧板は、明日 10 時まで、官舎を出る事。車や他の道具を使用するな、10 時以後の荷物は取り上げる、という内容でした。さあ大変です。私の着物全部並べてる所に、2 人のロシア兵が進入してきて、とび出て待つ事 30 分ほどで、主人の声に家に戻ると、まだロシア兵がいました。着物をあげる故に早く帰る様に言い、やっと話し合いがついた所でした。残物の整理が終り、明日どんな所に連れて行かれるかと、不安な一夜が明けました。さあ行きましようの声で、外に出てびっくり。ある人はタンスの引出しを腰に、リュックの上に坊やをのせて、汗だくでした。今、こんな姿を見れば「マンガ」ですが、当時は真剣です。だれの顔も緊張しており、私は最後に我家を振り返ると、家財道具や思い出の品々とも、今日限りの別れと、涙で見送りました。こんな事なら早くお金に替えればよかったと後悔しました。家財道具まで置いて出された、日本人の悲劇の日です。

着いた所は貧しいところで、畳一枚に一人の割当てで、四畳半にきました。農家の手伝いに頼まれ、食事が出るだけで無料ですが、飢えてる故に、喜んで行きました。ある時主人がタオルの包を娘に渡しました。タオルの中の白い御飯に、お正月の御馳走でも食べる様な喜びでした。主人はそばで、これだから向で喰わんのよと、一言。年内に引揚げがないと死者も出るだろう。地下の凍らぬ内にと、三角山を借りて、毎日交替で穴掘りに行きました。一まわり掘り終わった11月頃から人間の体力にも限界があります。飢えと寒さに負けて、毎日のように死者が出ました。お葬式もお棺の代わりにムシロの上に、佛様と棒を並べて巻いて、三ヶ所結んで佛ごしらえです。2人で佛様を三角山に置いて帰るのです。私も市場からの帰りに、お葬式に出会う事が有りました。胴のまわりが子供にしか見えないのに、十一文ほどの地下タビを見て、大人ですねと、友達と見送る事も度々でした。

21年5月に200人ほどの人夫の募集で行事に参加しました。家族と共に500人ほどで巽南駅を出発、安辺駅に到着した時に、私の家族に幸運が来ました。駅長さんは、主人の友人でした。駅長官舎で食事や風呂で一休みして駅に行った時には、日本人の団体はおらず貨物車の石炭車の上に娘を背に、高圧線のこわさより内地に帰る喜びで一ぱいでした。最終駅では300人余の引揚者と30人ほどの孤児が、同じ列車に乗り心強く思いました。国境の山道も、野宿しながら進み河原に出れば、食事や弁当を作り、休んでは行進のくりかえしでした。2人の兵隊さんが、「鉄カブト」で御飯をたいてる姿を思い出します。やがて、全員夢に見た「南朝鮮」の地。そのアメリカ兵や現地人のやさしい事。「北朝鮮」の生活とは、大ちがいでした。京城の日本人会の世話で貨物車で一泊し、コウリヤンの入った赤いおか湯を御馳走になりました。それから貨車で釜山へ行き、無事に22日には博多港に着きました。

駅まで焼野ヶ原を通り、駅前では引揚者のためにテント小屋で演芸や芝居、歌などで、私達を楽しませてくれました。出演者の皆様は、大学生の方だとか伺いましたが、大変有難く思いました。今は福岡市のために活躍されている事と思います。末娘も福岡で、三児の母となり忙しそうです。

長い間思い続けた体験も、私一代で終ろうとしています。戦争を知らない人々に、つらい思い出ですが書く事にしました。私も健康に恵まれて、同窓会やグラウンドゴルフなどで楽しい毎日です。

## 私の体験

伊藤 秀英 大正 11 年生まれ

昭和 20 年 8 月 9 日、ソ連軍の突然の侵入。そして容赦のない無抵抗の者に対する攻撃。その時から私達の地獄絵図が始まった。旧満州国（現中国東北地方）の黒竜江省方面の同胞の悲惨な体験は筆舌に尽せず恨み骨髓に徹する感であり、戦後四十数年経た今日でも、昨日の如く鮮明に脳裏を走ります。

当時、日本とソ連とは、お互いの不可侵条約を締結しておりました。にも拘らず、ソ連は突如条約を破って侵入してきました。戦後何百万の方々が海外から少しの損失はあるにせよ元気で引揚げられました。しかし満州方面はそれどころか無惨な状態でした。私が申し上げたい事は、個人でも国は勿論のこと、約束事は必ず守らねばならない。つまり、信義を守らぬ約束ごとなど砂上の楼閣に等しく、これを破って「勝てば官軍」ではすまされません。この様な不法なことがなければ残留同胞も整然と故国に帰れたはずです。残留孤児問題もなかったでしょう。

敗戦国民の私達、特に男達には厳しく、一言多い為その場で命をおとす場面も度々目のあたりに致しました。心では切齒扼腕しても、致し方のない時代でした。「赤い夕陽の満州に」など、歌われた昭和 14、5 年頃、満州に夢を抱いていた私は 18 歳でした。

始めて踏む大陸の地。緊張したものです。北満の佳木斯という街に到着。役所勤務を致しておりました。この間、中国の友人も出来、遊んだものです。招いたり招かれたりも致しました。やがて私も徴兵され、入隊し、2 年で除隊、やれやれと思う間もなく召集です。しかしこの時は敗戦直前で、命令伝達など不十分で、私の部隊は解散。一般難民となりました。持ち物一つない着たきり雀よろしく山野を歩き流浪の末の収容所生活でした。北満も 12 月ともなれば、零下 30 度は越し、寒さと栄養失調で連日たくさんの方が亡くなりました。老人子供と、体力のない者から倒れます。灯を燈すことも線香一本立てることもなく、只、涙の野辺送りの現実です。野辺といっても、収容所前の広場に埋めるのです。冬など土が凍り、深く掘れません。こんな時、野良犬が掘りおこし、正視出来なかった事をおぼえております。

進駐したソ連軍の命令により作業に出されます。私はある時トイレの掃除をさせられました。水が出ない為、糞尿は積んである状態。その中に、チリ紙の代用か軍票が 3、4 枚あり水で洗いポケットにしまい、全く天下をとった様に嬉しかったことを、今でもおぼえて

おります。帰り道、コーリャンを買い求め、みんなでお粥をすすって喜んだものでした。またある時郊外に連れて行かれみんな目は落ちこみ、胴の廻りなど親指と人差し指とでつまめる程のフラつく体で働きました。帰りに、ふと中国人のお百姓さんの門の前に立った時、後から肩をたたかれて中に入りました。そして、笑顔で暖かいご飯を手渡された時の感激は如何なる美辞麗句より嬉しく、この世の仏様の如く感じ、思わず両手でおがみしました。

こんな思いも、犠牲者の続出も、短期間で国境方面から、身一つで中央にたどりつき、何の用意も出来なかったことが原因と私はおもっています。このままでは、親と子と共倒れになること必至と考え、せめてこの子だけでも生きていてほしいと身を裂き肉をえぐられる思いをこめ、知人を通じて中国の方々に養育をお願いしたものです。生きておれば、いつか会える日もあろう。いや会えるはずと心に誓い別れたものとおもいます。半世紀近く過ぎた過去ですが中国残留孤児と題する報道を見聞する度に、往時が忍ばれ臉が熱くなります。

私の心の中では未だ終戦と申したくない孤児問題が走馬灯の如くかけ巡ります。

どうか皆さん肉親に必ず会えますように。いや、きっと会えます。

戦後混迷の中の一端を体験した者として申し上げ、ペンを置きます。

## 戦争体験記

伊藤 勝音 大正 14 年生まれ

私達は満州国厚生会三江支部に勤務していました。佳木斯市でした。4 枚の便箋には書ききれませんが・・・。

昭和 20 年 8 月 10 日ちょうど私の誕生日でした。隣組の組長さんから「ソ連の空襲が始まったらしいから 3 日分位の食糧を持って避難する様に」と伝達があり、男の人は全部軍隊へ召集された。勿論主人も応召、出発した。60 歳以上の男と女、子供だけが取り残され、唯うろたえるばかり。肌着の 2、3 枚と食糧を僅かばかりリュックに詰める。近所のロシア人のマダムがパンを焼いて「これを持って行って下さい」と泣きながら、私に手渡した。その時既に白系ロシア人の男子は全部スガリーに集合させられて居た。後で聞いた話では皆銃殺されたという。マダムが泣いて居たのがその為だったのかと胸の痛みを覚えた。

それぞれ隣組単位で駅まで出たけど肝心の汽車が無い。駅前を走る軍のトラックは木の枝や葉で擬装され兵隊は日の丸を染めた鉢巻を軍帽の上からキリッと締め、銃の先には着剣。傷病兵は担架で運ばれて来て、戦場そのものであった。汽車が来ないのでその日は分散して駅近くの家で一夜を過ごす。窓には畳を立て掛け電灯を消し寝もせずひっそりと息を潜めるだけで此の先どうなるのかと考える気力も無い。外で暴徒のピストルの音を数回聞いた。物盗りが始ったらしい。家を出てから何も食べていないのに空腹すら感じない。夜明けを待って駅に行く。四散した人達も集まって来た。両手に子供の手を背中リュックの上にも子供を乗せて、幼児達は皆おとなしく母の手をしっかりと握っていた。友人の久保さんと私だけが一人身だったが、その時ふっと気分が悪くなり、やはり身籠っていると直感した。

誰かが汽車が来たと大声で叫ぶ。だが無蓋車（石炭を運ぶ貨車）であった。仕方なく底の方に荷物を放り込み、その上にギュウギュウ詰めで座り何処へ連れて行ってくれるのか解らないまま汽車が動き出した。けれどその先の状態がどうなっているのか、汽車が通れるのか情報をお確かめながらの運行の為、時々停まってしまう。その間に農家へ走ってキュウリ等買って来て食べる人も居た。私は食欲が全く無く、マダムがくれたパンを傍の人達に上げてしまった。唯水ばかり飲んで居た組長の奥さんが「伊藤さん死んだら駄目。しっかりしなさい」と耳元で言って下さるが、かすかに聞こえるだけ。目を瞑っていたら楽な気がして、そのまま何日かかっただろうか。要何の駅、ここで戦争が終わった事を知る。

皆降りて歩いて下さいとの指示。ふらつく足でどれだけの時間がかかったやら、軍の格納庫に辿りつく。此処が避難民の収容所となる。武装解除された銃剣が山と積まれていた。兵隊の姿は見え、先に到着した組の中には知人もたくさん居たが、私は気分が悪く横になっていた。久保さんが馬車を雇ってきて「さあこれに乗って」と無理矢理に引張られ今来た道を駅へととばす。運良く今度は普通の汽車が停まっていた。やっと間に合い乗り込み一路ハルピンへと進む。窓の外を只呆然と眺めていたら、60半ばのおじいさんがズボンの上にへこ帯を締め、それに軍刀をさして「ここは俺が死守する。皆元気で日本へ帰るんだぞー」と大きく両手を振って見送ってくれたあの感動が今だに忘れられない。ハルピンに着いたら主人も会社の人達と無事に当地の支部に集まっていた。入隊する部隊が後退してしまって、そのまま解散したとか、此処に来る途中兵隊さん達はソ連兵の監視のもとにシベリアへ送られて行った。列車とすれ違いお互いに手を振って別れた。

男5人女3人、一軒の家に8人で同居生活が始まる。ソ連兵が銃で硝子を破り入って来る。何か言いながら胸にピストルを突きつける。物の無心をいっているらしいが、ロシア語が解らぬのが幸いにして知らん振りして本を読む。目が合うのを避ける為。その日は無事だったが、ソ連兵の訪問が始まる。その都度誰かが空缶をたたいて知らせる。男達は屋根裏にかくれ女達は外に出て物陰に身をひそめる。家の中に居れば、はずかしめを受けるからであった。肌を見せず汚い恰好をしていても女なら容赦なし。二ヶ月位毎日毎日が生死の境で生き延びていた。

新京（長安）へ移動する時も列車が何度も停められ、ソ連兵の女の要求と略奪。娘さんが汽車から引きずり降ろされた。泣き叫べども助ける事も出来ず、汽車は動いたが娘さんは帰って来なかった。汽車が停まる度に布に包んだものを線路の傍に小さな穴を掘って埋める。疲労と栄養失調の為、幼い命の数が日増しに減ってゆく。何と哀れな事か。新京では政府軍と八路軍の市街戦があり、その3日前に女兒を出産し、何とか皆様に助けられながら親子3人無事日本の土を踏む事が出来た。四十何年か前の戦争の悲劇です。

## 戦争体験記

大東 英喜 大正 15 年生まれ

昭和 19 年 2 月台湾高雄迄、船団護衛の任務に就く事になった。輸送船 6 隻、護衛艦は自艦駆逐艦峯風と、砲艦 1 隻の、計 8 隻となり、5 日積雪の門司港を出港した。速力は船団に合わせ平均 10 ノット、敵潜水艦の攻撃を避ける為、之字運動（蛇行）を行いつつ南下する。台湾の太平洋側を通り目的地に向かう。

私の配置は機関科指揮所内の通信伝令員であった。船橋からの指令を受けると復唱し、それを当直将校に報告後、各部署に伝達する。

2 月 10 日〇三三〇（午前 3 時 30 分）勤務交代する。〇四〇〇（午前 4 時）所定の作業を終わり一息ついた時、大音響と同時に艦が揺れ、室内灯が消えたのである。

何が起こったのか全く分からず、次の二回目の爆発音で艦が前部に傾き、始めて被害を受けた事に気付く。当直将校の「総員上甲板に上がれ」の命令で上がると、辺りはまだ暗く、既に艦の前部は沈み、悲愴な雰囲気になった。後部の方では、乗組員はカッターを降ろす準備をしたり、浮流物を海に投げ込んだりと、慌ただしい作業を続けていると、暗がりの海から突然艦長の「敵潜を撃て」の大声がした。艦長は左舷艦橋の真下に、魚雷が命中し爆風で、吹き飛ばされていた。左前方を見ると大胆にも、五百米位な距離に、敵潜が浮上しているではないか。自艦は次第に波間に沈んでいる状況で、悔しさと焦燥で一杯だ。その時味方の砲艦が敵潜に砲撃を開始したので、慌てて潜行したらしい。ふと我に振り返り日頃上司から言われていた、緊急時の私への指令を思い出し、再び後部居住区に降りて機密書類の“機関来歴簿”を懐中電灯を頼りに探したが、書類棚は傾いていた為錯乱し、見当たらなかった。その時上甲板から「もう艦は沈む。上がってこい」の声に上甲板に上がるとハッチを締め、飛び込む間もなく、艦が垂直になった。

瞬間私は消防ホース格納箱にぶら下がり、艦と一緒に海中に没したのである。苦悶のあまり二回程海水重油の混合物を飲む。大きな渦に巻き込まれていた。一時はもう駄目だと諦めかけたが、気を取り直し死力を尽くした。

立ち泳ぎで上がろうとするがもがきになる。息も絶え絶えのもう限界だと思われた時、目を開けると僅かに海面に近づいているのを感じた。薄明るくなっている。一瞬急に浮上した。思わず苦しさから解放され、歓喜の声をあげた。数名の兵も一緒であった。浮流物のテーブルに捕まり、夜明けまで長く感じた。3 名とも重油で真っ黒だ。テーブルに命を

託し漂流すること 10 時間余、お互いに励まし合い頑張った。薄着の為、寒さで疲労はしていたが、案じていた敵潜の再浮上と、フカに襲われることもなく味方の船に無事救助された。乗組員 200 名中、生存者 47 名だった。

三ヶ月後再び駆逐艦初霜乗組となり、以降南方作戦に参加、10 月 24 日敵機の攻撃を受け、左舷後部端に被弾したが、火災だけで収まり沈没は免れた。

しかし 30 名程の戦死者が出る。ばらばらになった戦友の死体をバスルームに収容後マニラで火葬する。昭和 20 年 4 月 6 日徳山出撃、大和を旗艦とする沖縄海上特攻に参加、戦艦大和以下巡洋艦矢矧、駆逐艦初霜を含む計 10 隻、一五〇〇出撃の壮途につく。翌 7 日 11 時頃敵機の大編隊をキャッチした。「対空戦闘配置に就け」の号令で総員配置につく。船橋より「敵機約 1000 機」との連絡を受け例により各部署に知らせる。戦闘は開始された。たちまち起こる砲声、機銃の音、爆弾の炸裂する凄まじい音が耳を聳する。次々と敵機の攻撃により撃沈されて行く。1 時間後、大和も爆弾十数発魚雷数本を受け左に傾斜、第二波攻撃により大和は更に爆弾魚雷を受け左に大きく傾き停止の状態となった。艦中央より火薬庫付近から大爆発が起り、艦は真っ二つに割れ艦首は高く海上に直立し、海中に消えた。時に、一四三〇。大和は日本海軍の誇りであり、不沈艦と信じていた私達は、無念の涙で頬を濡らした。幸いに初霜は多少の損傷はあったものの、冬月、雪風と共に翌日佐世保に入港した。

6 月初め宮津湾にて砲術学校の練習兵となり訓練を重ねていた。7 月 30 日敵機来襲し交戦中艦室付近で触雷閣座、戦死者数十名出す。私は衝撃で天井にぶち当たり床に落ちましたが怪我もなく、重軽傷者の救出に当たったことを覚えています。僅か二年余りの思い出を綴りましたが、九死に一生得たとは、正にこの事だと思えます。戦争ほど悲惨で残酷なものはなく、勝敗には関係なく、国民を不幸にするだけである。平和が如何に素晴しく、尊いものであるか。ちなみに私の兄二人共、陸軍軍人として、南方戦線で戦死したことを、銘記して筆を置くことにします。

## 平和の尊さ

東 金五郎 明治 41 年生まれ

昭和 20 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分空襲。

大阪市池田町に居住して居りましたが、昭和 20 年 6 月 1 日に爆撃され、それまでに 5 回程爆撃をうけて、あまり子供たちがかわいそうなので、故郷の広島市にあずけて自分は大阪に帰ってきました。広島は、これまで一度も爆撃されていなかったもので、6 月 9 日には大阪駅より広島の親戚宅へ子供たちを送りとどけました。

その後、8 月 4 日に広島から手紙が来ましたので読みますと、親戚のある地域一帯に家屋疎開するとの文面でした。しかし、その手紙は、当時 20 日間も遅れて届いた有様でした。

その夜 10 時頃の汽車で大阪駅を出発しましたが、普通なら翌日の朝 7 時頃広島駅に到着するはずのところ、途中空襲を受けて、もう一日遅れの朝 5 時に広島駅に着きました。その頃には空襲警報は解除されていたので、早速、親戚の家へ向かいましたが、すでに疎開したあとで、広場になっておりました。そのため、近くにもう一軒親戚がありましたのでたずねていきました。そこには叔父、叔母がおりました。そして、子供のことを聞きましたが知らないとのことでした。その頃には警戒警報も解除になりましたので、朝食後、叔父は会社に出勤し、私は一服して配給された煙草を吸っている時でした。

「ドカン」という音とともに一瞬真暗になり叔母を家からつれ出し、近くの公園の方へ避難しました。しかし、叔母は叔父のことが気がかりになり私と離れてしまいました。私も夢中で海の方へ逃げていましたが、自分は子供をさがしに来ているのに、逃げてはいけないと気が付き、たまたま海兵隊のトラックが来たので乗せてもらっては、さがし回りました。あたり一面は、火災で家屋は焼かれて、まさに焼け野原の状況でした。夜は公園などで野宿しながらさがし続けました。人のうわさを頼りに、子供づれの近眼の母子が疎開したと聞いては、もしやと思い行ってみた。そこには、親戚の者が居て、よろこんで子供のことを聞いてみましたら、前日に疎開先の息子さんが広島市内で豊商をしているところへ子供たちをつれて行ったがいまだに帰って来ないところをみると、原爆で死んだのではないかと心配していたとのことであった。

私は、大阪に帰るから、解り次第連絡してもらおうようお願いして帰りました。帰阪後 3 週間たっても連絡がないので、私もあきらめて死んだものと思っていました。

その後、昭和 51 年 7 月 15 日の夕刊に娘の文子が米国より里帰りし、31 年目にして親子の対面をしました。また、38 年目にして実弟とも再会することができました。

ただ、次男とはいまだに行方が分からず全国へ呼びかけております。

広島、長崎は近代都市として、いまは繁栄していますが、その外観から 40 年前の傷跡を探し出すことは、とても困難なことです。

原爆の洗礼を受け、復興の陰には、いまなお苦悩の生活を生き続けている犠牲者のあることを、見逃すことはできないと思います。

私たち同志は、身体的、精神的に、あるいは、社会的に、何らかの障害を訴え続け、現在でも原爆を怨（うら）み、自分たちの不運を嘆き悲しんでいます。

それが陰の事実なのです。

人間の記憶は、いつの場合でもあまり正確とはいえないと考えますが、被災についてはつきりと覚えている人たちの多いことに驚いています。

瞬間の事態が脳裏に焼きついて忘れようとしても忘れることができないのでしょう。

核兵器廃絶への道は遠く、そして厳しい世界の状況下にある現状ですが、決して絶対に座視することはできません。

戦争の知らない方々に少しでも理解していただいて、平和の尊さを身をもって確かめ、次の世代を担う人たちに引き継ごうではありませんか。

# 非核平和モニュメント

(非核平和都市宣言 5 周年記念)



設置場所 総合文化センター北側広場

台座文

和

非核都市 夢と希望と輝く未来

広島市から旧市役所庁舎の被爆石と長崎市から浦上天主堂の被爆レンガが世界の恒久平和を願う大東市民に贈られた

昭和 63 年 8 月 非核平和宣言都市 大東市

題字 大東市長 西村 昭

【 非核平和の願い込めて 】

このモニュメントは、青御影石で地球を表し、球状になっており「和」と命名されました。

これは永遠の平和、おだやかな地球、人類の輪を意味しています

# 非核平和都市宣言

恒久の平和と安全は、人類共通の願いである。

しかるに、核軍備の拡張は依然として行われ、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

私たちは、世界唯一の被爆国民として平和を希求する日本国憲法に則り、全人類が戦争の恐怖と経済的欠乏を免れ、平和のうちに生存する権利を有することを自覚し、あらゆる国の戦争と核兵器の廃絶を強く訴え、ともに、この人類普遍の大義に向って不断の努力を続けることを決意する。

よって、大東市は、ここに「非核平和都市」となることを宣言する。

昭和 58 年 9 月 28 日 大 東 市

# 広島市被害状況図

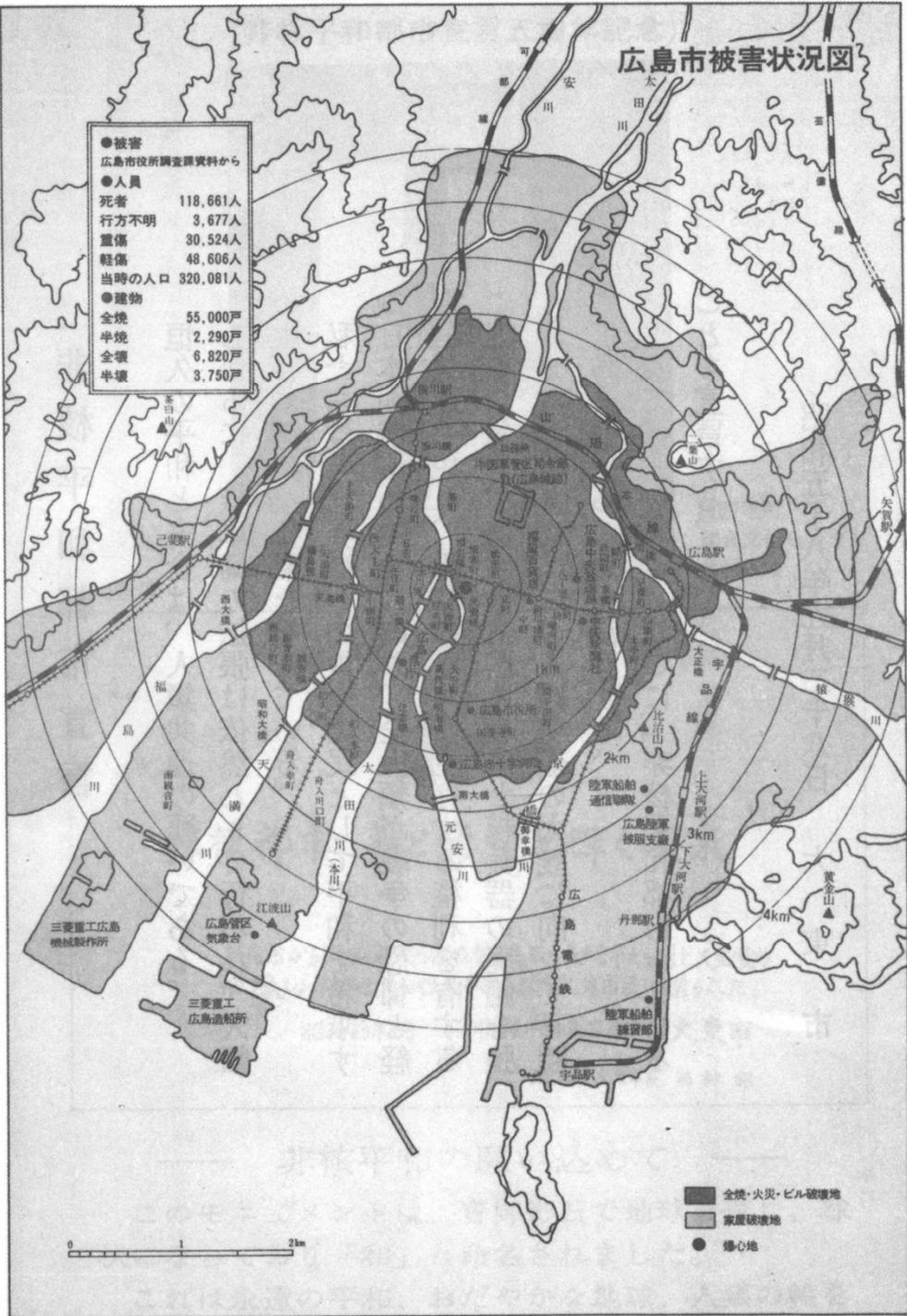
●被害  
広島市役所調査課資料から

●人員

死者	118,661人
行方不明	3,677人
重傷	30,524人
軽傷	48,606人
当時の人口	320,081人

●建物

全焼	55,000戸
半焼	2,290戸
全壊	6,820戸
半壊	3,750戸



■ 全焼・火災・ビル破壊地  
 □ 家屋破壊地  
 ● 爆心地

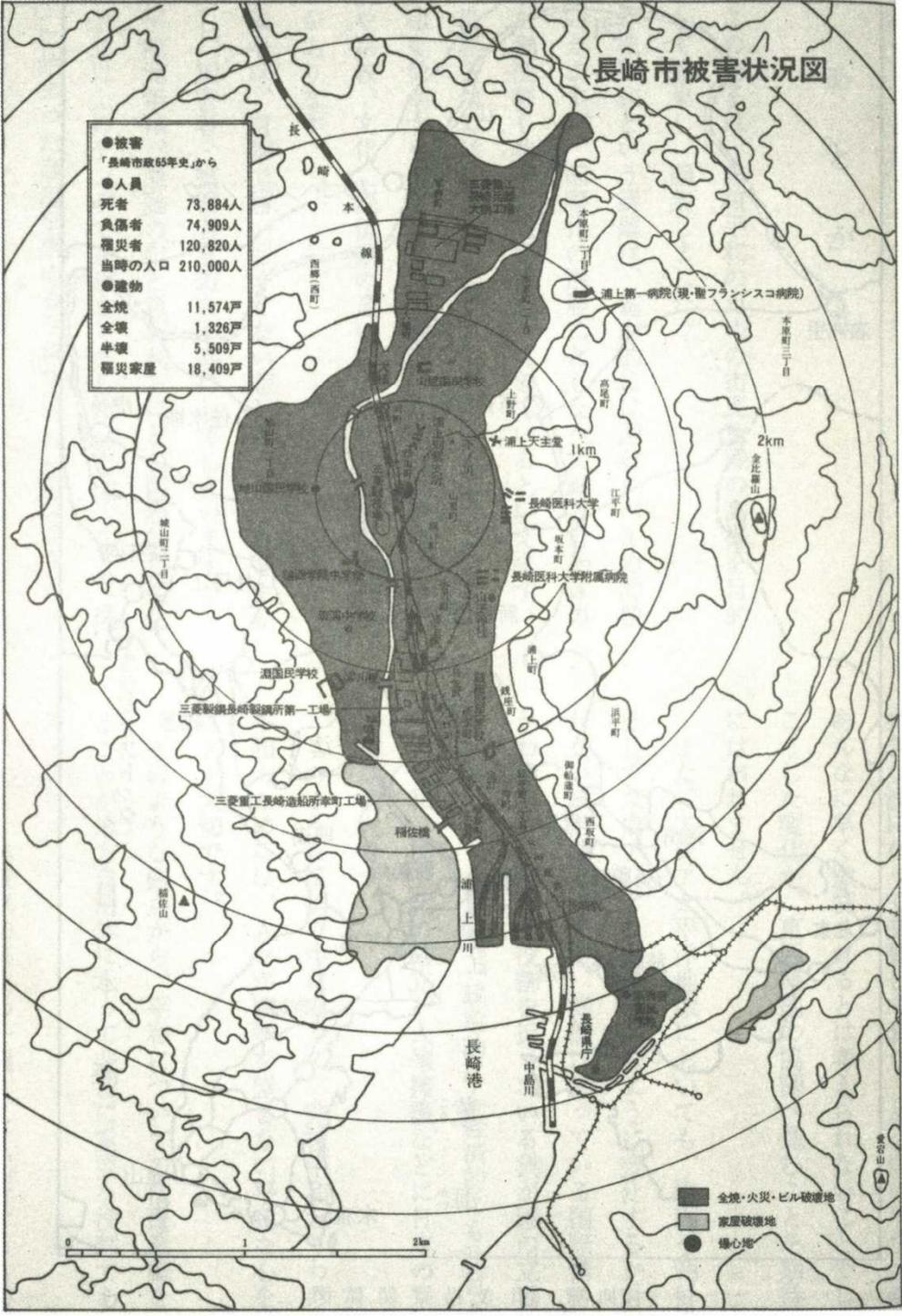
0 1 2km

# 長崎市被害状況図

●被害  
「長崎市史65年史」から

●人員  
死者 73,884人  
負傷者 74,909人  
罹災者 120,820人  
当時の人口 210,000人

●建物  
全焼 11,574戸  
全壊 1,326戸  
半壊 5,509戸  
罹災家屋 18,409戸



■ 全焼・火災・ビル破壊地  
■ 家屋破壊地  
● 爆心地





## あ と が き

この冊子は、非核平和のための市民意識の高揚を目的として募集し、編集しました。

非核平和という課題は、基本的には国政レベルの問題といえますが、国際化の進展にもなって地方自治体の果たす役割も非常に重要になってきているといえます。

世界各地では、現在でもなお武力紛争が発生しており、平和を脅かすものとしては、政治、経済的な利害の不一致や宗教、文化、価値観の違いによる相互理解の欠如などがあります。戦争は、言葉で言い尽くせない悲しみ、苦しみを生み出し、加害者・被害者双方を不幸にしてしまいます。

平成元年は、激動の年と言われるほどの国際的な変化が予想以上のテンポで過ぎ去りました。ポーランドの「連帯」に始まった自由を求めるうねりは、ハンガリー、チェコスロバキア、ブルガリア、東ドイツなどの東欧諸国に大きな波になって激動しており、とくにベルリンの壁があんなに早く撤廃されるとは考えられないことでした。こうした変化が、東西諸国の協調へ進むことを期待せずにはおれません。

また、アジア太平洋地域においても、中国や朝鮮半島そして東南アジアなど今後どのように変化するか計り知れない政治情勢ですが、転機に立っている国際情勢にかかわり非常に重要な役割を担っている我が国の立場は、戦前とは違った意味で、政治的にも経済的にも注目され、非核平和、民主化の確立、人権擁護などに日本の果たす役割は重大です。

このような情勢の中であって、非核平和とりわけ世界平和のためには、人々が戦争を望まない平和な心を持つことが大切です。

そのような観点から、平和についての住民意識を高めることが地方自治体にとって非常に重要な役割であると考えます。

本書は非核平和事業の一環として刊行するものですが、この体験記の中では被害者としての体験を中心に綴られています。しかし、戦争には加害者が存在することを決して忘れてはなりません。加害者にも被害者にもならないために市民が自らの体験記の中で戦争の悲惨さと、核兵器の恐怖と人類滅亡の危惧を語り、戦争体験を正しく次の世代に語り継ぐことが大切です。

なお、用語に一部不適切な表現もありますが、その部分をあえて改めることはしませんでした。文意が通じない部分等につきましては、編集者の責任において、できる限り筆者の意図を生かすように書きかえました。

総務部総務課

1990年3月

編集・発行

大東市総務部総務課

大東市谷川1丁目1番1号

TEL(0720)72-2181

2020年9月

複製

大東市市民生活部人権室

大東市谷川1丁目1番1号

TEL(072)872-2181



大 東 市

印刷物番号

2 - 5 4